

# 金沢出張の記録 (2018年1月20・21日)

文責: 得居千照 (筑波大学大学院)

## 出張概要

- (1) 出張期間 2018年1月21日(土)、22日(日)
- (2) 出張者(敬称略)
  - 河野哲也(立教大学文学部教授)
  - 佐古仁志(立教大学RA)
  - 永井玲衣(上智大学大学院・立教大学RA)
  - 古賀裕也(高校講師)
  - 得居千照(筑波大学大学院)
- (3) 主催
  - 科研費補助金事業「新学術領域研究」:「トランスカルチャー状況下における顔身体学の構築～多文化をつなぐ顔と身体表現」
- (4) 協力・同行
  - 野中祐美子(金沢21世紀美術館学芸員)、森絵里花(金沢21世紀美術館)
  - 金光秀和(金沢工業大学准教授)
  - 関本 幸(ミネソタ州立大学)

以下、それぞれの活動の記録を詳述する。

## 金沢21世紀美術館と顔身体カフェ

日 時：2018年1月21日(土)18:00～20:45頃

場 所：金沢21世紀美術館

参加者：参加者23名、出張メンバー 9名(計32名)

### (1) 作品の鑑賞、学芸員による作品解説 (18:00～19:20)

金沢21世紀美術館の常設展示を、野中学芸員による解説とともに鑑賞した。

鑑賞した展示は、以下の5つ。

- ① カラー・アクティヴィティ・ハウス
- ② ラッピング
- ③ アリーナのためのクランクフェルト・ナンバー3
- ④ ブルー・プラネット・スカイ
- ⑤ スイミング・プール



## 金沢21世紀美術館と顔身体カフェ

日 時：2018年1月21日(土)18:00～20:45頃

場 所：金沢21世紀美術館

参加者：参加者23名、出張メンバー 9名(計32名)

### (2) 作品鑑賞の振り返りから哲学カフェ (19:30～20:45)

参加者23名＋出張メンバー7名の計30名が、3つのグループに分かれ、それぞれ哲学対話を行った。  
ファシリテーターは、永井、古賀、得居が務めた。

作品鑑賞の感想や振り返りに始まり、以下のような問いで対話が進められた。

「見るたびに違う感じを受けるものはアート作品だけか？そしてそもそもそう感じるのはなぜか？」

「見られるとはなにか？」

「現代美術とは？アートとは？」

対話後の参加者のアンケートには、「ゆっくりと時間を使ってものを考えるのが久しぶりで、それが美術鑑賞の場合には時間がゆっくりと、哲学対話の場合には時間が早く感じられたのが不思議でした」などの記述がみられた。



## 兼六園哲学ウォークと日本家屋での哲学カフェ

### (1) 兼六園哲学ウォーク (13:00~15:00頃)

金光氏を案内人に、10名が哲学者の言葉が書かれた短冊を手に、兼六園から金沢学生のまち市民交流館までの道のりを散策した。

日 時: 2018年1月22日(日)13:00~17:00

場 所: 兼六園、金沢学生のまち市民交流館

参加者: 参加者7名、出張メンバー 9名(計32名)

参加者は、短冊の言葉にふさわしいと思った風景に出会ったら「ストップ」をかける。風景とともに写真を撮り、理由を説明。他の参加者より投げかけられた複数の質問の中から一つを選び、ゴールまでの道のり、その問いに考えを巡らせた。

たとえば、西田幾多郎の「花が花の本性を現じたる時最も美なるがごとく、人間が人間の本性を現じたる時は美の頂上に達するのである。」という言葉の短冊を手に散策を行った参加者は、椿の花の前で「ストップ」をかけ、落ちていた花の様子とともに理由を語った。他の参加者からは、「花の本性とは、花が落ちることにあるのか」など、複数の質問が挙げられた。



## 兼六園哲学ウォークと日本家屋での哲学カフェ

### (2) 日本家屋での哲学カフェ (15:00~17:00頃)

「金沢学生のまち市民交流館」に到着後、散策の途中で撮影した写真を振り返りながら、哲学対話を行った。ファシリテーターは、永井が務めた。対話においては、「経験とはなにか」「ならうとはなにか」など、哲学ウォークで持ち帰ってきた問いへの回答から問いが発展し、行われた。

日 時: 2018年1月22日(日)13:00~17:00

場 所: 兼六園、金沢学生のまち市民交流館

参加者: 参加者7名、出張メンバー 9名(計32名)

対話後の参加者のアンケートには、「皆で、うんうん、考え込みながら歩きまわる、というのがとても面白かったです。風景を見ながら、いつもだと「これきれい！」「こんなのおもしろい！」とってひろいあげているものを、お題があることで、あえて取り上げず、別のものをひろいあげる、という体験は自分の頭にも新鮮でした」などの記述がみられた。



- 本プロジェクトは、科研費補助金事業「新学術領域研究」:「トランスカルチャー状況下における顔身体学の構築～多文化をつなぐ顔と身体表現」計画班「顔と身体の比較現象学」(代表:河野哲也)の助成を受け、活動を展開しています。

